

感謝箱献金だより

ガリラヤのほとり 23 号

感謝箱献金事務局（コア）〒221-0852 神奈川県横浜市神奈川区三ツ沢下町 14-57 横浜聖アンデレ教会内

TEL/FAX 045-620-8282 E-mail:kansyabako@grace.ocn.ne.jp

神さまからのプレゼントに答えて

「感謝に満ちてみ前に進み、賛美の歌で神をたたえよう」

（詩篇第 9 5 編 2 節 日本聖公会祈祷書より）



大阪教区主教 アンデレ 磯 晴久

主の聖名を賛美いたします。

感謝箱献金活動とそのささげ先となっている諸活動に対して、心より敬意を表します。

今回「ガリラヤのほとり 第 23 号」の原稿依頼と共に、17 号から 22 号までのバックナンバーを送付して下さいました。改めて目を通して、お恥ずかしい話ですが、感謝箱献金のささげ先が、これほど多様で、世界中のこどもたちや女性たちをはじめ人々の命を守り、平和を実現していくために重要な活動に対してであったことを、ちゃんと認識できていなかったことに気づかされました。そしてこうした献金の発露が、皆様の「感謝の心」であることを教えて頂きました。なんせ「感謝箱献金」ですから、名は体を表しています。

さて、そこで思い出したお話があります。アメリカで禅の普及に取り組んでおられるお坊さんのお話です。そのお坊さんは、トイレの掃除や床の拭き掃除に始まる禅の修行で、アメリカの人々に伝えたいこととして、次の 4 つのことを挙げられました。

1 つ目は「Thank you.」です。ありがとう・感謝の心を素直に表現できること。2 つ目は「I'm sorry.」です。間違ったら素直にごめんなさいと言えること。3 つ目は「Forgiveness」です。赦しということ。わたしもあなたも赦されている存在であることを自覚すること。4 つ目は「Love」です。わたしは愛されている存在であること。そして「I love you.」わたしはあなたを愛していますが言える人になること。その中で、一番大切なことは、「生かされていることへの感謝の心です。」と結ばれたのです。私はこのお話を聞いて、「えー、その 4 つはキリスト教の専売特許やないか。」と思わず心の中で叫んでしまいました。

私たちも負けてられへんなと思いました。

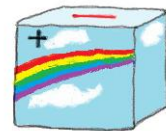
心に手を当てて考えてみますと、わたしたちは神様から一杯プレゼントを頂いています。

聖書、イエスさま、イエスさまの十字架と復活と昇天、教会、聖餐式、洗礼・堅信式・祈祷書、聖歌、信仰の友、家族、……、何よりこの「いのち」。数え切れないほど沢山のものを頂いています。更に、どれか私がお願いして頂いたものがあるのでしょうか。みんな神様の大きな愛のお心から、一方的に頂いたものではないのでしょうか。詩編の作者は、神の恵みに応えて、感謝と賛美をささげようと謳います。頂くばかりではいけないでしょう。何かをささげていくことが肝要です。感謝と賛美こそ、信仰生活の中で大切なことです。その具体的な形の一つが「感謝箱献金」です。日々の小さな感謝と賛美が集まっての感謝箱献金が、聖公会、いや世界の中で大きな働きを支えています。

これからも感謝箱献金のお働きの上に、また婦人会のお働きの上に神さまの祝福と導きが豊かにありますようにお祈りして参ります。

2016 年度 感謝箱献金

お献げ先のご紹介



全国の婦人会の皆さまから 2015 年に寄せられた感謝箱献金は約 231 万円でした。お献げ先については第 25(定期)総会において協議され、今年度は 7 つの団体にお献げし、また、積立金として東日本大震災で被災され未だ困難を強いられている方々のため、そして、災害緊急時に被災地への支援を迅速に行うための支出を可能とするため、これら二種類の積立(3 年間継続)をはじめめることに決めました。

エルサレム教区「聖地ろうあ子どもの里」(HLID)

—ヨルダンの障がい児教育とシリア難民キャンプを支援—



エルサレム教区の働きで 1964 年にヨルダンに開設された、聴覚に障がいのある子どものための寄宿学校です。現在もヨルダン国内における障がい児教育の重要な働きを担っています。(在校生 108 名)

手話による一般の学校と同様の授業の他、自動車整備、手工芸品等の職業訓練など、将来、地域社会に有意義な形で参加していくことを願い授業が行われています。近年では重複障がい(三重苦)の子どもを受け入れも増えています。障がいにより、外界との関係が築けず孤独のうちに留まってしまわない

よう、昼夜を問わず献身的なケアと指導が続けられています。専門性の高い指導が求められるなかで、これらの専門教育に携わる指導者やスタッフ、補聴器技師の育成にも力を入れています。

また、HLID では、国の支援の行き届かない地域に、現地に出向いての支援(アウトリーチ活動)にも積極的に取り組んでおり、拠点となる施設を運営し、四肢障がいのリハビリや知的障がい児クラスを設けての教育、若い世代の障がい者の就労支援や地域の女性の職業訓練も行っています。

この他、世界最大規模といわれるザータリ(Za'atari)難民キャンプにおいて、シリアから戦火を逃れてきた人々、主に障がいに苦しむ子どもと高齢者のための専門性を生かした支援活動を行っています。これらの活動資金の一部補助に用いていただくため、35 万円をお献げしました。(光益)

ニームの会

—南インドの女性運動団体「WORLD」を支援—



畑で作業する女性たち

南インドのダリット(元アウトカースト)女性を支援している WORLD とともに活動している日本のグループです。村の貧困女性を含め、カーストを越えた女性の仲間意識が生まれることによって自立への支援を行っています。WORLD 農村センターの土地を利用し、訓練を受け有機栽培を行っていて、スーパーマーケットなどでの販売も可能になってきています。昨年は集中豪雨の自然災害を

克服し新たな作業を始めました。自然農法のため、豚、ねずみ、虫の害を避ける訓練も必要であり、自然堆肥を使った栽培への意識も高まりつつあります。自然農法による生産活動を再開、訓練と農機具購入や種子などの購入のため、10 万円をお献げいたしました。(古谷)

リグリマ・ジャパン

—バングラデシュの少数民族ガロ族の女性の支援—



リグリマとは、“団結、結束、共助”を意味するバングラデシュ北部に住む、少数民族ガロのガロ語です。リグリマ・ジャパンは、ガロの女性達の地位向上、経済的自立、差別の撤廃、尊厳の回復、弱者が安心して暮らせる社会を目指す為、ガロ民族で設立された“リグリマ・バングラデシュ”を共に支える活動を行っています。就学、就労の機会も与えられず、日常的な蔑視と差別の中、活動を続けており、特に裁縫

プロジェクトでは、日本人指導者によるトレーニングで日本向けに、ブック・カバーやティッシュペーパー・カバーを製作し、テーブルクロスや巾着袋は、国内で販売するため手芸品店に出し、収入を得ることが出来ました。「リグリマ製品」を作るという最終目標に向かって、喜びと希望を皆で分かち合っています。

医療指導では、無知だった病気に対しても、対処の仕方を学び、命の大切さを知り、皆で助け合っています。殊に、ガンを患うメンバーの為に、自主的に寄付を募り、ガロの目標である“自ら考え行動する”を実行しています。

ガロの人々が暮らす洪水多発地域では、人々のたんぱく資源を補う為に養殖池で育てている稚魚が流れ出てしまわないよう、池の掘削が必要とされます。掘削済みの池では、稚魚が育ち、成長した魚の販売も可能となり、生活の助けと励みにもなっており、マイノリティとして生きる苦しさ乗り越えようと頑張っています。活動のため 25 万円をお献げいたしました。（土屋）

サイディアフラハ

—ケニアの貧困地域に暮らす子どもたちへの支援活動—



スワヒリ語で「幸せのお手伝い」という意味を持つサイディアフラハはケニアで児童養護施設の運営を柱に、子どもと女性の福祉のために活動する NGO 団体です。このサイディアフラハが活動するキテンゲラはケニアの首都から約 90 キロ離れた町で、この近郊に団体が運営する児童養護施設があります。ケニアでは未だ男尊女卑の傾向が強く、弱い立場に置かれがちな女子を優先的に保護し、極

度の貧困から養育を放棄された幼児や、親と死別し預けられた先で労働力としてしか扱ってもらうことのできない等の約 20 名の女子が 3 人のスタッフの見守りの元で暮らしています。しかし施設の運営資金が潤沢でないため受け入れには慎重にならざるを得ない状況もみられます。また幼稚園と小学校（低学年対象）も併設しており、孤児以外にも地域の児童への学習指導や、就労の機会に恵まれない若い女性を対象とした裁縫訓練による自立・自活の手助けなども行っています。施設に暮らす子どもたちの支援のため、今年度は 15 万円をお献げします。（相宮）

中部教区「可児ミッション」

—移住労働者の家族と子どもたちを支える働き—



2009 年、可児市周辺に居住する外国人(主にフィリピン人)への宣教活動とその子ども達への養護と教育を主な活動目的として設立されました。2013 年には「可児聖三一教会」として再出発し、祈りと交わりの場にもなっています。厳しい労働条件の下で移住労働者として働く外国人保護者は、言葉の壁や文化・習慣の違いから生活面で、また子育てに関しても知識・情報は得に

くく、多くの困難を抱えて生活しています。可児ミッションでは未就学児の保育及び保健事業(健康診断・歯科検診、保健教育他)、就学児も含む早朝や延長預かり保育、小中学校に編入学する子ども達への学習や日本語指導などを通じて子ども達が地域の学校や地域社会の一員としてスムーズに溶け込めるよう活動を展開しています。感謝箱献金は 2014 年度には送迎用バス購入資金の一部として、2015 年度はお昼寝用布団の購入と月謝の一部補助する奨学金制度の資金の一部として使用されました。可児ミッションは法人格を取得し 2016 年 4 月から「特定非営利活動(NPO)法人 可児ミッション」になりました。子ども達が日本の子ども達と同様に、継続して保育・教育を受けられ家族で健やかに安心して暮らすことができるよう活動を続けています。子どもたちの健康を守るため地域や行政と連携をとり歯科検診を実施しながら、昼食時の栄養面にも気を配っています。本年度は昼食時のメニューとして子どもたちにも人気の味噌汁・副菜を提供する費用(年長児 25 名分相当)に充てるものとし 20 万円をお献げしました。(斉藤)

リフレッシュ・プログラム(継続)

—原発と放射能に関する特別プロジェクト—



日本聖公会管区での取り組み、「いっしょに歩こう! パートⅡ」が終了し、「正義と平和委員会」に活動は移管されました。「原発と放射能に関する特別問題プロジェクト」は、福島の子どもたちのためのリフレッシュ・プログラムを企画し活動を続けています。

震災後 5 年半を過ぎても福島での原発と放射能に対しての不安(特に子どもたちへの心身の影響)は続いています。子どもたちの命を守り、未来へ

の希望が持てるように、このプログラムを今後も続けて行くことが有効であることは、今までの実施体験でも明らかになっています。郡山セントポール幼稚園、小名浜聖テモテ幼稚園の園児を中心に遠足やキャンプを実施すること。外で思いっきり遊ぶことの出来ない子どもたちが、海や山や川や土の上で駆け回り、笑顔で過ごせるよう、今年も放射能線量の低い地域への遠足や、他教区の協力を得て自然の中で自由に過ごせる夏のキャンプを実施するための費用の一部として、15 万円をお献げいたしました。(古谷)

「難キ連」 難民・移住労働者問題キリスト教連絡会 —入管センターに収容されている外国籍の人たちへの面会支援—



牛久にある収容センター

世界中の問題でもあります。目の前に助けを求めている難民のために、面会支援等の活動を続けている「難キ連」に対して、10万円をお献げいたしました。

(近藤)

東日本大震災支援（積立）

—被災地に暮らす人々に寄り添う支援—



磯山聖ヨハネ教会跡地を訪問

東日本大震災から5年半を過ぎ、人々の記憶からも遠ざかろうとしている現在、今なお、放射能の影響で自宅に戻れず、家族が離ればなれになり希望のない不安の中で生活している方たちが多くおられます。震災当時から5年間は毎年50万円を積立て、南相馬の被災者の方たちにビニールハウスでの野菜栽培に必要な種子や肥料の提供、「リフレッシュ・プログラム」への支援、音楽グループの訪問の費用一部などを

お献げしてきました。時間は経過しても関心を持ち続け、今後何が出来ののかを考えつつ支えるために20万円を3年間積立てます。

(古谷)

災害被災者支援（積立）

—地域を限定せず迅速な支援を可能にするため—



(イメージ)

今まで、国内外を問わず、大きな災害が起こり、支援の必要と思われるとき、感謝箱献金から「緊急支援」として、お祈りと共に管区の募金窓口を通してお献げしてきました。今後もいつどこで発生するかもしれない大災害に即、対応出来るよう、前年度に集まった感謝箱献金総額から2016年から3年間、毎年30万円を積み立てます。

(古谷)



国際子ども学校より

皆さまが寄せられた感謝箱献金の中から、長きに亘り国際子ども学校 (ELCC) にご支援をいただき、誠にありがとうございます。
ELCC はお蔭様で創立18年目に入りました。皆さまのご理解と温かなお祈りの内にこれまで続けることができましたことと、心より感謝申し上げます。

当初、名古屋市に住むフィリピン人移住労働者の子どもたちは、さまざまな事情で無国籍状態におかれ、地域の公立学校に行くことが困難な状況にありました。国際子ども学校 (以下ELCC) は、そのような子どもたちのために設立されました。数年後、地域の方々と共に働きかけ、子どもたちは学校

に通えるようになりました。

現在、ELCCには小・中学校への編入学をめざして、主に3〜5歳児が多く通ってきています。日本の学校にスムーズになじむことができるよう、日本語の授業を多く取り入れている一方、フィリピンに帰る子どももありますので、英語・フィリピン語でも授業を行っています。

移住労働者である多くの保護者は、不安定な職業にしかつけないかったり、シングルマザーであったりするため、月謝を払えない場合も多く、学校運営はなかなか厳しい状態です。

少子高齢化により、外国人労働者の受け入れを増やそうという政府の方針に伴い、今後子どもたちも増えていくと考えられます。保護者や子どもにとって日本語の壁は大きいので、子どもたちが勉強への意欲をもち、クラスの中で孤立する存在にならないためにも、就学前の準備 (日本語の習得や日本の学校生活について学ぶことな

ど) が必要となります。ELCCはそのような役割を果たすための学校でもあると思われれます

先頃の総会にて今年度は残念ながららご支援をいただくことができなくなりました。ELCCを必要としている子どもたちがいる限り、今後ともELCCを維持継続していく所存ですが、そのための資金集めが必要とされております。大変厚かましいお願いとは存じますが、ELCCに献品・献金のご支援をいただきますよう、皆さまどうぞよろしくお願い申し上げます。

名古屋学生青年センター
総主事代行 近澤淑子

献品・献金をお願いします

☆ 献品送り先

お家に眠っている図書券、図書カードなど (日本語の教科書、参考書、ドリルなどを購入のため)

〒466-0804

名古屋市昭和区宮東町260

名古屋学生青年センター内

国際子ども学校宛

☆ 献金の送り先

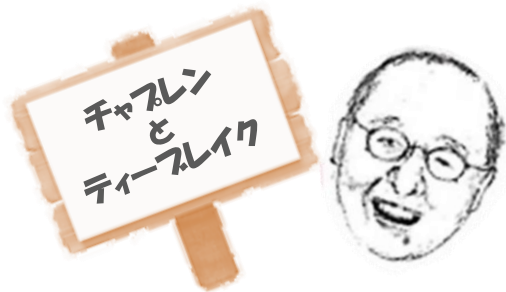
現金書留または郵便振替にてお願いします (日本語・音楽・体育の教材となるものなどを購入のため)

振替口座名…学生青年センター

国際子ども学校

口座番号…0088501114684





絵：三原晶子

茫然と立ち尽くす人々

熊本地震から3ヶ月が過ぎました。4月14日と16日の2度の大きな地震でした。後の方が本震と言われています。特に2度目の時の大きな地震の恐ろしさとショックを聞きました。熊本聖三一ボランティアセンターでの活動に参加して、リーダーからのお話で、送られてきた「九州地震被災者のための祈り」の中の、「一瞬にして、大切な家族や友人、また家や財産をなくし、茫然と立ち尽くす人々がいます」について、これは具体的に、Aさんを見てそう祈らざるを得なかった、ということで、加えられた言葉であるというのが、心に残りました。7月4日～8日のボランティアでしたがその後も余震が続き、大雨もあり、ようやく復興に向けて歩み出そうという感じでした。センターには沢山の仕事の依頼が来ています。

今回、依頼された仕事の一つに、Kさん宅の倒壊した二階建ての納屋から「管理機」（耕運機で耕した畑に野菜用のうねをたてたり、溝を掘ったりする作業をする）を傷つけずに引き出して欲しいというのがありました。そのまま放置され、まず大雨でぬかるみ、うじが沸いて悪臭を放つ土砂やがれきやごみをかき出すことから始まりました。Kさん夫妻と我々5人で2日かかり、管理機は取り出され、エンジンがかかった時には歓声があがりました。

それにしても「茫然と立ち尽くす」ことのあまりに多い世界の現実です。自然災害にしても昔は考えられなかったような規模の水害や竜巻など、東日本大震災での地震に続く津波、更に原発事故による放射能汚染、更に、抑圧され続けているパレスチナの人々、世界各地で多発する様々なテロの脅威・・・そのような出来事の中で、今も失意と絶望に内に、茫然と立ち尽くす人々がいます。そして、そのような人々の傍らに寄り添い支援しようとする人々がいます。感謝箱献金運動は、そのような支援する人々や団体を支援するのです。「がんばろう」というよりは「生きよう」という励ましの言葉に魅かれます。にもかかわらず、生きよう、というメッセージと共に、奉献してまいりましょう。

チャプレン 司祭 ヤコブ 三原一男

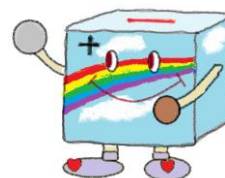


太い柱の下敷きになった管理機



無事に掘り出され、順調に作動

感謝箱献金についての説明会開催のご報告



5月29日（日）、東京教区 大森聖アグネス教会に感謝箱献金説明のため、4名のスタッフが訪問いたしました。お礼拝の後、市原信太郎司祭と27名の方がお集まりくださり、約30分、パワーポイントを使いお献げ先の紹介、感謝箱の歴史をお話いたしました。以前、日聖婦の会長を務めておられ、現在は「一粒の麦の会」会長の保坂さんのご参加で「一粒の麦の会」とのちがい等もお話いただきました。

後日、電話をいただき、感謝箱献金の必要性が良く理解でき、感謝箱が身近に感じられる様になった。と三人の方から連絡をいただきました。ありがとうございました。

（土屋晴子）



大森聖アグネス教会礼拝堂にて、説明会の様子



お手製の大きな感謝箱を用い、集いの場での献金も心掛けてくださっています。

感謝箱献金活動を

一緒にお支えください



- ❖ お友達やご家族に、感謝箱献金の働きをご紹介下さい。
- ❖ 感謝箱献金便り「ガリラヤのほとり」を集いの場等でお読みいただき、困難のうちにある方々をお祈りにお覚え下さい。
- ❖ 所属教会での感謝箱の設置と管理にご協力下さい。

ご希望の方には機関誌や献金箱を郵送いたします。
下記の感謝箱献金事務局までご連絡ください。

☎ 045-620-8282

e-mail : kansyabako@grace.ocn.ne.jp



「賜物を生かし、正しく用いて」



中部教区（東京教区主教座聖堂出向）
司祭 ダビデ 市原信太郎

先だって、小生が主日礼拝をお手伝いしている大森聖アグネス教会に、感謝箱献金事務局の皆様が来訪され、礼拝後にこの働きについてご説明くださいました。その中で、戦前より様々な伝道事業に婦人会が協力していたことが語られ、小生が神学生時代に台湾伝道の歴史を調べた時のことを思い出しました。今回、この際のご縁で原稿を依頼されましたので、この学びを通して感じたことを述べたいと思います。

台湾伝道を企画した当時の日本聖公会は未だ組織として草創期にあり、自給すら達成できていない状態で、その初めての海外伝道事業として開始された台湾伝道は、常に様々な困難にさらされていました。特に、経済的・人的な困難は大きく、しばしば伝道事業の海外宣教団体への移管などが議論されました。その中で、婦人伝道補助会がこの事業の大きな支えとなりました。

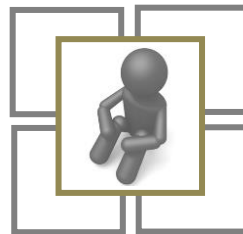
婦人補助会による伝道局や台湾聖公会への寄付がなければ、この事業は維持できない状態でしたし、特に伝道局の経費が各地方部（現在の教区）に割り当てられるようになってからは、その割当金の半額以上を各地方の婦人補助会が負担していました。その他、教会建築のためなどにも多額の献金がなされました。

人的な支援にも力強いものがありました。婦人補助会の中央組織より、丹下得喜子師と岩田とく子師が婦人伝道師として台湾に派遣されましたが、このお二人の働きは司祭の補助者に留まらず、「自主的、信仰的、家族的」と称された台湾の聖公会の特徴を形作った大きな支えでありました。

現代の視点からは、戦前の台湾伝道事業についての批判が少なからずあることも事実ですが、しかしその時代の中で婦人達が感謝をもって献げ、それを誠実に用いて種々の働きがなされたことを、大切に受けとめたいと思います。わたしたちが過去の営みに向ける視線は、現在の自分自身の営みにも向けるべき視線でもあります。

「神よ、すべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません」（歴上 29:14）というダビデの言葉通り、感謝箱献金は神からわたしたちに与えられているものに感謝し、それを神にお返しする働きです。この働きの中で、わたしたちは「正しく用いる」ことをも合わせて願い求めなければならないと思います。「与えられた賜物を正しく用いる」人間の責任が、近年刊行された各国聖公会の祈祷書や聖歌集では特に強調されています。感謝箱献金の働きは、わたしたちが「自分の賜物を生かし、正しく用いているか」を問い続ける働きでもあるでしょう。

感謝箱献金事務局の方々からは、「国内外の紛争・災害・貧困・差別に苦しんでいる方々を思い、微力ながら何か支援できればと、祈りつつ活動している」と伺っております。多くの方々が感謝箱献金の歩みに加わり、ご自分の賜物が生き生きと、正しく用いられているかどうかを常に問いかける、そんな働きとしてこれからもますます盛んになることをお祈りいたします。



面会支援ボランティアに参加して

茂原昇天教会 信徒 リベカ 永井 眞由美

6月23日に東京入国管理局(品川入管)で行われた、横浜教区社会委員会主催の「面会支援ボランティア」に参加しました。当日は難民・移住労働者問題キリスト教連絡会(難キ連)事務局長の佐藤直子姉、聖職者、社会委員、教区婦人会役員、信徒の13名で4組に分かれ面会支援を致しました。

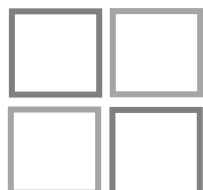
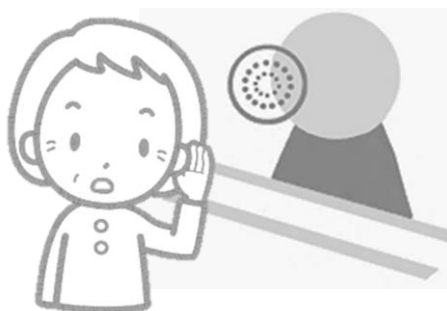
私は品川入管での面会支援は今回初めてでした。今まで何回か茨城県牛久市にある東日本入国管理センター(牛久収容所)での面会支援に参加していました。品川入管に行き、とても驚いたのは入口ロビーの人の多さ、混雑です。色々の国の人々が多種多様な言語で話しています。品川入管と牛久収容所の業務内容や交通事情の違いはあるにしても…。品川入管では面会の他に各種申請や審査が行われています。また品川入管はJR品川駅からバス(数分おきに出ています)で7～8分です。それに比べ牛久収容所を訪れる人は面会者及び支援者です。交通手段はJR常磐線牛久駅からバス(一日に9本しかありません)で約20分です。静かな林の中に建ち、面会者の待合室も閑散としています。

両施設とも被収容者は多くの問題、悩みを抱えています。健康面でも不調を訴える人が殆どです。収容されている不安からくる大きなストレスが原因と思われるものも多いようです。また母国に居る家族の安否。日本国内に居る家族の生活、経済面など深刻な事情ばかりです。収容所施設内に於ける医療、食事などの生活面の処遇にも問題があるようです。このような余りにも多くの問題に取り組み、改善、解決のために難キ連は日々活動されています。面会支援ボランティアには諸問題の改善、解決は出来ません。被収容者と面会し困っている事、外部の人に伝えたい事、必要な物を聞き取り佐藤姉に伝えます。その情報をもとに難キ連が適切な対応をします。面会支援ボランティアはどなたにも出来ます。勿論、日本語での聞き取りです。被収容者の背景には、母国での人種、宗教などの対立、政権への批判、反対運動などがあります。その事を通して諸外国の情勢を知り、思いがけない学びがあります。

日本における難民問題には色々なご意見がありますが、このような境遇に置かれている人々が多数いる事を知って頂き、少しでも関心を持って下さればと思います。

もし機会がありましたら、是非一度、面会支援ボランティアに参加される事をお勧め致します。

(横浜教区婦人会 元会長)





教区婦人会からの声

東日本大震災より5年半を経た今も、多くの方が放射能の被害や、自宅の被害で、家族も離散し、困難な状況に置かれています。被災地をかかえる東北教区婦人会も感謝箱献金に50%をお送り下さり、今年度も日本聖公会婦人会としてのお献げ先が決まりました。感謝箱献金に対する思いと共に、東北教区としての献金先などを会長の佐藤洋子さんよりご寄稿いただきました。

8

感謝箱献金の働きに心を寄せて

東北教区婦人会 会長 アグネス 佐藤 洋子

東北教区は、ご存知のように、東日本大震災に遭い、言葉には言い表せない辛苦と、今なお困難の中にある人々が、不安を抱えながら日々を戦っている現状があります。

しかし、皆様からの温かいお励ましとお祈りに支えられ、常に心を寄せていただいていることを心から感謝申し上げます。

感謝箱献金が立ち上げられたのは、遠く明治26年に、「一致献金」として始められたことを伺っておりますが、日々の感謝のこころを神様の宣教の業に参加する喜びとして、献金箱の形を以って続けてこられた歴史があります。

東北教区は、6県に位置する17教会婦人会で構成され、東北教区婦人会役員の任期を2年とし、持ち廻りの順番制で担っております。教区の先輩婦人の方々の貴い志と働きにより、現在に至る長い歴史を刻み、活動を続けて来た経緯があります。2年に1度総会を、隔年ブロック（県単位）会を開催し、交流を図ってまいりました。

感謝箱献金のお捧げ先は、各教会婦人会に希望先を募り、役員会にて検討し、本年は総額の50%を日本聖公会婦人会へ、50%を教区内を含め、

- 1、ひかりおもちゃ図書館
- 2、原発と放射能に関する特別プロジェクト
- 3、国境なき医師団
- 4、カナンの園

以上の四施設へ、少しでも生かされた貴重な働きの一助となりますように願いながら奉獻致しました。

献金先への現地訪問、目に見えるふれあいを持ち、海外へも赴き、心の通った繋がりを持たれ、又、私達にその分かち合いをして下さるコアスタッフの献身的なお働きには、日頃より感謝の念を抱いております。誠に有難うございます。

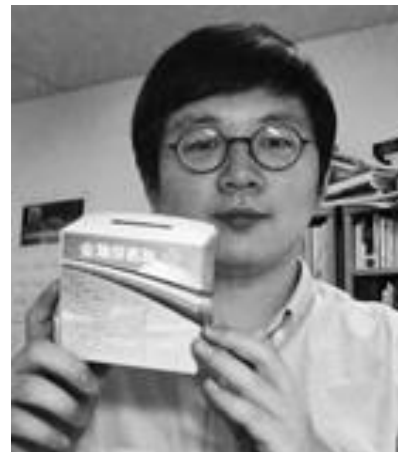
しかし、教区内の隅々にまでもう一步浸透しきれていない現状があるのではとの反省を込め、積極的に折にふれ、お知らせできたならと感じています。

私達教区の一人ひとりが信徒として、今後も小さな歩みですが、感謝箱献金に心を向けて、神様の恵みの中に生かされていることを感じながら、ご奉仕を続けて参りたいと思います。

感謝箱とわたし

神学生 アンデレ 松山 健作

「感謝箱」の存在について知ったのは、今年に入ってからでした。思い返してみると母教会でも置いてあったと思うのですが、その詳しい働きについては知らず、そして自らそこに献金をしたことはありませんでした。知るきっかけとなったのは、現在の実習教会である川口基督教会の婦人会が感謝箱の宣伝を大々的にされていたからです。教会内では「この箱に献金を集めて何に用いるのか？」という質問がなされ、「その時に必要としているところにお捧げします」という回答でした。最初は献金目的が少し不透明では！？という印象を持ちました。が、日聖婦総会が京都教区センターで行われた際にこれまでのお捧げ先一覧を拝見し、もっと積極的に献金してくれば良かった、あるいは宣伝してくればよかったと思わされるほどに、良い働きに用いられていることを知りました。来年には現場に派遣されることになるのですが、ぜひこの献金運動にも参加できればと思います。



出身：大阪
特技：卓球
趣味：写真を撮ること
経歴：延世大学大学院修学、
現在ウィリアムス神学館で修学中

と言いますのは、私がかつて4年ほど通っていた大韓聖公会では、大斎節になると感謝箱より少し小さいサイズの献金箱が配られます。大斎節中の40日間に毎日献金をお捧げしていっぱいになったら、教会に持っていくという運動に好感を持ち、積極的に参加していました。それはことに TOPIK（北



大韓聖公会の献金箱の写真

朝鮮人道支援)の働きのためであったり、カンボジアの子供たちにきれいな水を飲んでもらうための掘削作業の費用であったりと具体的な信施先があらかじめ選定されて、大斎節の期間を覚えて過ごすというものでした。こういった献金運動が日本聖公会にもあればなと思って帰国して2年が経つ頃、この「感謝箱」に出会ったというわけです。

この感謝箱献金のお働きが今後ますます盛んになりますように、覚えてお祈りしつつ、わたし自身も参加できればと思っています。

「聖地ろうあ子どもの里」(HLID) への感謝箱献金を託しました



献金をお渡しする様子

去る7月16日(土) 東京教区主教座聖堂にて、エルサレム・中東教区のジョージ・コプティ司祭による『ヨルダンで難民を支援する』という講演会が開かれました。主催は東京教区正義と平和協議会と信仰と生活委員会・人権委員会の共催です。

エルサレム・中東教区は5カ国(パレスチナ、ヨルダン、イスラエル、シリア、レバノン)にまたがっている教区です。コプティ司祭はアンマン市にある聖パウロ教会で難民支援の活動をしています。私たちの支援先「聖地ろうあ子どもの里」(HLID)はヨルダンにあります。

聖オルバン教会の吉松夫妻にご紹介いただき、コプティ司祭に支援金35万円をドルにして、日聖婦前田会長のメッセージとともにお渡し、HLIDの施設長ブラザー・アンドリュースへの取次を託しました。

エルサレム教区には難民が多く、教会が人々の生活の手助けをしています。食糧など物資を配るのではなく、スーパーなどのクーポンを渡して、彼ら自身に買い物をしてもらう、という方法をとっているそうです。DVDで見る彼らは、様々な困難に直面してきたにもかかわらず、神様への信仰を力強く告白していました。(金子みどり)

編集後記

2016年度感謝箱献金のお献げ先が日本聖公会婦人会総会において決まりましたのでご報告させていただきます。各教区婦人会でも感謝箱献金をお献げ下さっており、今回は東北教区婦人会の様子をお知らせ下さいました。全国の婦人会の皆様のご協力と、ご奉仕と共に祈りに支えられておりますことを、心から感謝申し上げます。(J. 近藤)